

教員採用試験受験における STEAM 教育の活用実践（大阪市受験報告）

舟橋 美 佑*

1. 受験の概要

筆者が教員採用試験で合格した自治体は大阪市（小学校）である。STEAM Lab 学生部カリキュラム・マネジメント部門の一員としての活動実績や教育実習の課題解決などで取り組んだことなどを、どのように受験時にアピールし、合格にたどり着けたのか、その体験についてまとめておきたい。

2. 受験に向けての準備・出願（エントリーシート）

大阪市の教員採用試験を受ける準備として、日頃から大学の授業の一つひとつ真剣に取り組む、より高い成績をとることを目標として取り組んでいた。

また、教職支援課が主催している「基礎学力向上講座タニ☆スタ6」や「教職基礎演習」にも自主的に参加・履修をして事前に対策していた。これらの授業では「教職教養」、「一般教養」、「面接対策（個人・集団・討論）」、「SPI」などを学んだ。上回生と一緒に参加する機会も多く、真剣な眼差しで取り組む先輩方の姿勢を見ることができたおかげで、高いモチベーションで教員採用試験対策に取り組めた。

元来、大阪市で教師をしたいという思いがあったが、ほかの自治体も受けることで可能性が広がると先輩や先生方から聞き、大阪市、高知県、横浜市に出願することを目標として、これらの自治体に広く対応すべく、「一般教養」や「SPI」を中心に、3回生の10月頃から問題集を用いて勉強していた。

特に、第一志望である大阪市の筆記試験で課されるSPIに苦戦した。再度ゼミの先生、先輩、現職の先生などから大阪市専願で受けるか、他自治体と併願するか相談をして、最後の最後まで悩んだ結果、地元である大阪市を大学推薦枠（専願）で受験しようと決意した。

学内での選考審査を通過し、大阪市から課された課題である小論文「いじめに対してどのように教育活動をしていくか」という主題について、教職支援課の先生に丁寧な時間をかけてご指導や実際の学校現場の話聞く中

で、いじめという大きな課題を見つめなおす機会となった。

大学推薦は二次試験からの受験となり、最初の実技試験の日に事前に提出したエントリーシート（面接個票）には、資料1のような内容を記した。

資料1 大阪市教員採用試験受験時のエントリーシート（面接個票）

注：筆者作成。

二次試験に向けた準備を進める中で、この内容では自分の特徴（自分らしさ）をちゃんと反映できておらず、自らの性格や経験をもっと細かく掘り下げて分析しなおす必要性を強く感じるようになった。エントリーシートの提出期限にはこうした分析が間に合わなかったものの、面接当日に口頭でアピールする内容に自分の教育観や特性を特徴と明確に伝えられるように徹底的に自己分析を進めた。分析の際には、指導教員や仲間と情報共有を行いやすいように、メモアプリを用いてキー入力やApple Pencilの手書き機能を使って書きこんだデータや、紙に手書きした項目をカメラで撮影してAirDropで送るなど、iPadを中心としたICT機器を積極的に活用した。

3. 実技試験（2021.08.17）

大学推薦組は実技試験の受験科目を早めに決定し、提出する必要があった。実技試験で重要なのは、「適切な

*大阪大谷大学

指導を受けられる環境づくり」と「より高い点数を取るための工夫」である。自分の場合はこれらの重要性をあまりわかっていない春先の段階で、スポーツもピアノも苦手で、初めての取り組みとなる英会話への不安など安直な理由で音楽実技（リコーダー・歌唱）を選択してしまった。ここで慎重に戦略を考えなかったしわ寄せが夏以降の試験対策で苦しむ契機となった。

実技は配点がそれほど高くないのだから、簡単な曲をそれなりに弾けたらいい、元気よく笑顔で大きな声で歌えたらいいといった考えでは合格は難しい。特にリコーダーはピアノ等の楽器に比べて技術的な要求水準に差があるので、選曲から慎重な吟味や工夫が求められる。曲は楽譜が用意できるのであれば、どんな曲でもよいとされていたため、小学校時代に弾いたことがある「ふるさと」を演奏するつもりでいた。しかし、自分の練習や努力で到達可能なより高い水準の演奏を目標とするために、拍子や指使いをアピールできるリコーダー由来の楽曲として「ピタゴラスイッチのテーマ」を演奏することとした。楽譜は iPad のアプリである「Touch Notation」を用いて一から作成した。

歌唱は共通教材からの選択であったが、当初想定していた「もみじ」から、自分の音域や歌唱力を最大限にアピールできる「冬げしき」に変更した。より高い評価を目指すのであれば、発声の仕方や正しい音程、強弱など細かいところを重視しなければならない。一番注意したところは、単語や文節の頭の音を正確に強く出すことである。何度も練習し、体に叩き込むようにした。

練習方法としては、自宅から「Zoom」を用いて指導教員のアドバイスを受けたり、大学のピアノ練習室を利用して一人で黙々と練習したりした。また、カラオケボックスや空き教室など大学の友人の耳に入る環境下などに披露する練習を行った。歌唱は発声の仕方やフレーズの頭の音をしっかり出すこと、曲の流れや盛り上がりを考えて歌うことを意識して、多い時には1日6時間ほど同じ曲を何度も繰り返して特訓した。リコーダーは指使いをアピールできるようなアレンジ楽譜を自作し、単調にならないような工夫を行った。

本番当日は会場に用意された歌詞プリントを受け取り、出番まで教室前で座って待機していた。自分の番が来るまで、注意点を最終確認していた。本番では、まず歌唱から披露した。面接官が「終わりというまで続けてください」という指示を聞き、歌った。1番は何度も練習を繰り返していたおかげで、自然体で歌うことができた。2番は歌詞が曖昧だったので、歌詞をちらちら確認しながら歌った。どのように面接官に映ってしまうのか

を気にする形になるので、2番まで暗譜しておいた方がよかったと反省した。次の楽器演奏（リコーダー）も、同様に終わりと言われるまで繰り返すように指示を受けた。1回目は手が震えて見せ場の部分を正しく演奏できなかった。しかし、挽回しようという気持ちを持ってたおかげで、2回目は練習通りの演奏ができた。

4. 筆記試験（2021.08.21）

筆記試験の勉強にあたっては、大学の教職教育センターの自主学習室や食堂などを利用していた。コロナ禍ということもあり、自宅学習もしていたが、やはり自分に甘くなってしまう。そのため人の目がある場所でする時間の方が多かった。また、友人とすることで「教えあう」ということができたり、勉強することが辛くなったときに励まして高めあえるということが何よりも大きな支えだった。大学主催の4回生対象合格セミナーにも参加することで、どのような勉強方法が自分に合っているのかということも知ることができた。

筆記対策は時間配分を意識して取り組んだ。正確さを求めて時間を掛けすぎる傾向があったので、試験直前は過去問題を用いて、時間内にすべての問題に手を付ける練習をした。数学や理科は特に基礎から応用と幅広い傾向があるため、時間を設定して解くべきだと思う。また、暗記である社会は得点源となるので早い段階から毎日こつこつと取り組むことが重要である。特に、歴史は日本史、世界史、現代と覚えなければならないことが多い。

また、問題集に傾向が示されているが、鵜呑みにしてはならない。今回、大阪市の筆記試験では国語に古典が導入されていた。教員になるにあたり必要のない勉強などないのだと思い知らされた。傾向を考えて効率よく勉強することも大切なことだが、それ以上に前もって全ての分野を理解することが何よりも合格への近道だと考える。

また、自身の所有している iPad や Apple Pencil を活用して様々な問題を解いた。多くの自治体が PDF として過去問題を公開してくださっているので、手書き入力でも何度も繰り返し解けるようにした。

また、教職基礎演習で経験した学習方法をヒントに、Apple TV のミラーリング機能を用いて説明をしながら答え合わせを行った。そうすることで、解き方を共有し、本当に理解しているのかということ確かめて進められた。解き方がわからない時には、YouTube の教員採用試験対策をまとめてくださっている動画などを活用することもあった。特に社会の歴史は得点源なので、試験

直前まで教科書や自身でまとめたノートを見ていた。

本番の手応えとしては、半分も取れていないと思うほど全く自信がなかった。国語の傾向が変わっていたり、社会の時代の並び替え問題も苦手とする部分が出題されたりと不安要素が多かった。

特に筆記試験の4日前に迫った実技試験の直前になると、完璧を目指して集中して練習に専念した結果、筆記試験の対策が疎かになってしまった。これが後の筆記試験の結果に大きな影響を与えたとの反省もある。もっと事前に時間をかけて、自分のものにできたのではないのかということや実技試験に力を入れすぎて疎かにしてしまったということが頭によぎり、エントリーシート（面接個票）も十分にできていないこともあって、最後に残す面接にすべてを懸けないといけないと危機感を持って気持ちを引き締める結果となった。

筆記試験の準備や対策においても、普段使いでICTを活用できたことでデータや解法の共有をスムーズに行うことができる効果を実感した。当たり前に使っていた活用方法が、次に述べる面接試験のアピールポイントとしてつながることとなった。

5. 面接試験・場面指導（2021.09.25）

大阪市の面接試験は個人面接であり、自分だけに注目してもらえる絶好のアピールの場である。面接官から聞かれた内容のみをそのまま答えていればいいわけではない。その質問の意図を読み取り、自分の特徴や経験（自分らしさ）を活かして、教員になった際に臨んでいく姿勢を端的に述べる必要がある。加えて、自分自身でも気づかなかつたり、よく考えてこなかった側面についてもしっかり分析して伝える必要がある。

以上の自己分析を進めた結果、大阪市の教員の志望動機（1分間用）として、下記のような内容にまとめた。

私の特徴は、2つの「モノログ」にあります。

恩師の一言に導かれて打ち込んだ剣道では、キャプテンとして平常心を大切に、仲間が思わず声を掛けられる「思考整理のモノログ」で、気がつけばまとまっている集団づくりで戦いに臨んだ結果、大阪市大会で準優勝を勝ち取りました。

また、地元の伝統行事である住吉踊りでは、大舞台で自信を持って臨める「型」を確立するために、納得いくまで繰り返す「定着のモノログ」で、失敗を恐れずに臨む姿勢を磨きました。

以上の特徴や経験を活かし、大阪市の伝統文化のもつ魅力を伝えながら、児童が自分の強みを拠り所に多様性

を認め合える学級を築き、自力解決に向かって互いに協力する姿を支える教員を目指したいと考え、志望しました。

志望動機では、よく独り言をつぶやきながら行動する特徴をもとに、地元の行事に長く関わってきた経験や部活の実績を織り交ぜ、資料1に書いた内容を限られた時間で端的にアピールできるように努めた。

また、自己PR（1分間用）は次のように作成した。

私の持ち味は、「こだわる力」と「こだわらない力」の使い分けにあります。

私には、周囲の仲間を respect しつつ rival と捉え、諦めずに努力し続けるこだわりがあります。教育実習での授業づくりなどで力不足を痛感した時にも、同期の実習生や支えてくれた先輩の先生方など、余裕のない中で必死で頑張る自分の頭には、いつも敬意を持てるライバルの存在がありました。

また、私は他者をこだわりなく受け止める姿勢を大事にしています。青少年活動ボランティア「あいす・おおさか」では、ボランティア・リーダーとして初めてのキャンプで親元を離れて不安な児童の言動の理解に努め、安心感につなげることができました。

以上の経験を活かし、学び続ける教員としてこだわりを持つとともに、自分の感情や意思にこだわらずに様々な人たちと向き合える教員として、保護者や現場の先生方と協働したいです。

自己PRでは、資料1に示した教育実習やボランティアの経験に自分の特徴を象徴するエピソードを得意の英語を意識して含めながら、相手の悩みや相談を受け止める「アサーティブ・マインド」を軸に据えた。

こうした志望動機や自己PRはある程度用意してくる受験者が増えたこともあって、実際の面接試験では（特に自己PRは）質問されないことも少なくない。しかし、こうした内容をまとめておくことで、個々の質問で自分の特徴や経験をどのようにアピールすべきかといった「引き出し」を明確に意識できる。上記の文章を暗唱しておわるのではなく、個別に項目化しておいて、他の質問で伝える準備や工夫が重要となってくる。

大阪市は英語教育に対して重点を置いている。そのため中学校・高等学校教諭免許を取得予定ということを入りシート（面接個票）、面接の中でアピールした。なぜ小学校を選んだのかという質問では、「ゼミの先生がマレーシア出身でALTの経験者である指導教員に学

んでおり、これを生かせるのは小学校だと考えたから」という専門性をアピールしようと決めた。

また、大阪市は ICT 教育の推進にも力を入れており、STEAM 教育の実践とのつながりが役立った。そのひとつが、先述のように iPad や Apple Pencil を記録や振り返りに抵抗なく使えることで「普段使いを周りに勧め」役割である。もうひとつが、自分の持ち味である英語への関心や専門性を活かした「カリキュラム・マネジメント」である。教育実習では、勉強不足もあって授業づくりなどでの苦労が絶えなかった。この課題を大学へ持ち帰り、STEAM Lab 学生部カリキュラム・マネジメント部門のメンバーで協力して小学校算数科の授業づくりを行い、筆者は英語科担当として、算数の学習内容と英語（語の由来や国際文化との比較など）を関連づける教科等横断的な工夫を実際に経験し、面接前に具体的にアピールできるように実績を残した。

面接練習では、iPad の動画撮影やボイスメモで記録を残し、AppleTV でミラーリングを行い、個々の言動を具体的に振り返り、次に生かせるように活用した。やりっぱなしで終わらず、発言の内容のみならず言い回しや伝え方を把握確認する上でも、振り返りの工夫は非常に効果的である。

また、場面指導の対策では、土日や長期休業の期間には現職教員である卒業生の先輩をお願いして指導をいただいた。日常的に保護者の方と実際に関わりのある現職教員の先輩からの実体験を元にした助言や練習は本当に勉強になるので、普段から先輩方とつながりを持つとともに、在学中に先輩方と一緒に勉強させてもらえる機会を活用して人脈を築いておくことがいかに重要かを痛感した。こうした貴重な機会を無駄にしないように、平日などの時間では友人と 100 問ほどの場面を想定して練習を重ねた。

本番では、面接試験の質問数は 5 題 12 問（場面指導 1 題 4 問を含む）であった。中学校・高等学校教諭英語一種免許状を取得予定のため、5 題中 2 題が英語教育に関する質問であった。

面接会場に入った際に、「マスクを着けたままでも取ってくれてもどちらでも構いません」と言われた。そこで自分の持ち味である「剣道顔（恩師である顧問の先生から言われた特徴）」をアピールする意を込め、マスクを外して臨んだ。

面接官は 3 名で、1 人目は所有免許に関する質問からスタートした。1 題目「小学校・中高英語と免許を取得して、なぜ小学校を希望するのか？」では、先述のゼミでの学びを含めた英語教育と自分の特徴を関連付けて回

答した。2 題目「教育実習はどうだったか」では、小学校・中学校の実習経験と先述の苦労について発言すると、追質問で「この苦労を繰り返さないために取り組んだこと」を尋ねられ、STEAM Lab カリキュラム・マネジメント部門の授業作りの実績をアピールした。

2 人目の面接官は場面指導を担当し、3 題目「修学旅行のバス座席に関する子ども対応」について応答を行った。練習時にも苦戦した「（相手の気持ちや意図をノープランで尋ねるのではなく）ある程度気持ちを読みながら話を聞く」姿勢を徹底した。

3 人目の面接官からは、4 題目「小学校英語を低学年化からやるメリットと気をつける点」について質疑があり、国際文化への理解やオーストラリアのホームステイ経験などを関連付けながら回答した。最後に 5 題目として「最近腹が立ったことは何か、またどのように解決をしたか」という質問があった。そこで、自己 PR で想定していた「アサーティブ・マインド」という自分の特徴とつなげて回答を行った。

質問が英語に関する点を中心だったこともあって、偏ったアピールになったのが反省点である。志望動機で想定していた住吉踊りなどの地元での経験や特徴を伝えられればとの思いもあったが、このように「もっと伝えたい」と思えること自体が自分の引き出しを充実できた証拠でもあるので、全体的には準備した成果をある程度発揮できたのではないかと感じている。

6. 受験経験から得た教訓

最後に、教員になりたいという大きな挑戦にこれから向き合う方々に少しでもお役に立てるよう、私自身が教訓として学んだ「教員採用試験受験 7 か条」を示したい。

(1) 確実に先手を打てる方策を確立しよう

その自治体で勤めるかどうかは合格してから選ぶべき話であり、その自治体を受験するかどうかは出願してから考えればいい話である。「どうせ受かっても行かないし」「受けるかどうかもわからんし」といった言い訳をする人ほど不合格が目立つ。自分も受験前は同じように考えていたこともあったが、身近で併願受験する仲間と一緒に勉強する中で、大きなメリットがあることに気づいた。

例えば自分が最も合格したいと希望する自治体の試験の前に計画的に併願の機会を作れば、場数を踏んで質問に対する応答の方法を掴むことができる。多くの自治体を受けた友人と面接練習をする中で、仕上がりの早さに

明確な差を感じた。場数を踏むのが狙いなら、場所や合格可能性よりも、自分が本命とする自治体の練習にもなり得る日程や種目を重視した方が望ましい。他方、本命の自治体が不合格だった場合に他の合格先にも目を向ける可能性があるなら、日程の重なりや（過去を含めた）受験倍率にも注目する必要があるだろう。

エントリーシートは面接当日に持参する場合もあるが、事前の提出を求めるところも少なくない。したがって、エントリーシート提出までに自己分析を行い、面接で使用する自分の特徴を導き出して整理しておく必要がある。資料1のように特徴が導き出せていないのは、面接試験の前に大きく出遅れている事実を示している。こうなると面接試験当日の出来栄で挽回する必要があり、不利な状況を生み出さないためにも早めに仕上げられる環境を築く上で併願受験は効果的である。逆に専願で絶対に合格したいというなら、相応の覚悟と確実に先手を打てる計画性、もしくは巡り合わせや運に左右されずに戦える圧倒的な実力と努力が不可欠である。

出願や試験当日には、必要な書類や準備物が多くある。私は、受験票やエントリーシートに添付する写真の枚数を間違えていて、試験当日にバタバタしてしまったトラブルがあった。余計なことで振り回されないように早めに準備し、何度も確認することを勧めたい。

(2) 先輩とのつながりを大事に

(1) で示した先手をどのように打てばいいのか、最も参考になるのは身近な先輩の情報や経験である。教員採用試験についての相談や悩みに限らず、教育現場の課題や実習のつまづきを解決する手助けにもなる。面接では教育現場の特徴や課題にどれだけ精通しているかも重要な観点であり、日常的に先輩から話が聞ける環境はメリットが大きい。教職対策系の授業や講座に1・2回生の頃から顔を出して、本番が迫った先輩の緊張感を共有しながら刺激を受けることは、その後の関係にも大きな影響がある。ゼミやサークルなどの枠に留まらない交友関係を築けるよう、積極的な行動をお勧めしたい。

(3) 噂や傾向を鵜呑みにしない

(2) で示したような先人や仲間のアドバイスや情報は非常にためになるが、かといってどんな情報でも鵜呑みにして決めつけるのは危険である。特に学習法や試験の傾向などで広がっている噂のような限られた情報で行動を左右されるのは失敗を招きやすい。今回の経験でいえば、国語の問題で古典分野が出題されたり、面接で必ず尋ねられると噂されていた項目が聞かれなかったりし

た。傾向を参考にしながらも鵜呑みにして決めつけず、あらゆる可能性を想定して準備をきちんとしていればなんの問題もない。「これくらいでまあいいか」と妥協せずに、やるべきことに手を尽くしていることが重要である。

(4) 特徴や実績をこと細かに振り返る

他者との違いや自分にしかない特徴などがホイホイ出てきたら苦労はしない。自己分析では幼稚園から今までの全ての表彰経験やエピソードなどを洗い出すことが必要である。自身が大したことないものだと思いついていた経験や事例も人と違う特徴になり、アピールできることがある。私の場合、住吉踊りへの参加経験を大阪市の郷土愛をアピールできる材料になることを考えていく中で、追質問のタイミングではより小規模な地域単位である「御崎北町獅子お囃子連保存会」の活動経験なども重ねてアピールしようと考えていくことで、発言に自信や深みが伴うようになった。

「自分らしさ」を模索する上では、プラス面よりもマイナス面の方が参考になる。筆者の場合、他人の言っていることをすぐに理解できない場合が多く、自分の中に落とし込むためにぶつぶつと独り言を呟く癖があり、あまり良いことだと考えていなかった。しかし、これが他者にはない特徴と捉えると非常に魅力的に感じるようになり、「思考整理のモノログ（独り言）」というアピールにつながった。

面接では、どんな質問がどれだけ出されるかは当日までわからない。しかし、自分の芯となる特徴の柱を7個ほど考えて経験や具体的エピソードとともに引き出しから自在に出して話せるようにしておけば、ある程度の対応は可能である。つまり、面接の流れによっては、同じ質問が来ても常に同じ回答になるとは限らない点に注意が必要である。面接は筆記試験のように共通の正解があるわけではない。だからと言ってアドリブで挑めるような簡単なものでもない。無難な回答を心がけているだけではどこかでボロが出てしまう。教育観を定め、自分の特徴を整理し、経験やエピソードと絡めて話せるよう磨き上げて定着を図ることが重要である。一人で練習する際にはすらすら話せるように反復を重視し、仲間や先生方に指導いただける機会では自分の話した内容や伝え方を振り返るフィードバックが非常に重要となる。その際、STEAM教育の実践でも触れたようなICTの活用が効果的である。

(5) 「何時間かけても解く」から「時間内に解く」

時間が間に合わず、解ける問題で点数を取れないことが一番もったいないことである。問題集を解く際から時間を定めて多くの問題に触れることが大切である。筆者自身も、その日の集中力で勉強する時間が左右されていた。問題にてこずったり気分が乗らなかつたりする際には進度も遅れ気味で、代償が試験の正答率に表れている。最初のうちは時間をかけても解けるように勉強して、反復を行う中で徐々に時間内に解く効率性を身につけて定着を図るのが重要と考える。

(6) 「背伸びした身の丈」を意識した実技を

実技試験は配点も小さいのだから、そつなく無難にこなせば十分という発想はあまり賢明ではない。「そこそこ泳げるから」「まあまあピアノが弾けるから」などの理由で実技にあまり力を注がない人をよく目にしたが、細かな評価点が存在しない影響もあって評価が1ランク違うだけで筆記試験数問分の差が出ると考えれば、少しでも高い評価を目指して最善を尽くすべきだろうし、労力に比べて差がつきやすい種目でもある。

筆者は当初、一番失敗の可能性が低いリコーダーが無難と考え、選択した。しかし、よく考えてみればピアノなどよりも難易度が高くない楽器は練習量の割に点数に結びつきにくいのが当然であって、これなら頑張っってピアノや英会話に挑戦した方が自分に合っていたかもしれないと後悔した。

後の祭りにならないように、今の段階で自分が確実にできるレベルより低い目標を定めるのではなく、頑張れば届くであろう「背伸びした身の丈」を基準に種目や内容を想定して準備を進めることが重要である。自分で判断が難しい場合には、周囲の仲間や先輩や指導教員に相談してラインを見定め、CランクならBランクを、BランクならAランクに少しでも近づく努力を計画的に進める工夫が求められる。

(7) 頼りっぱなしやアテにするだけではNG

これまでの結果を見てもわかるように、言われるがままに準備しておけば教職教育センターが自分たちを合格させてくれるわけではない。やり方や支援の内容に不満を持つ暇があったら、最善の方策を自らの責任で模索し、信じて努力し続ける必要がある。

7. おわりに

本報告で取り上げた自治体を受験するにあたっては、事前準備をする時点から教員採用試験の戦いは始まっているということがわかった。結果として大阪市から合格通知をいただき、大阪市の教員として4月から勤務予定である。本報告を参考に、夢を叶えるために、最後まで自分自身の力を最大限発揮し、悔いのない大学生活を送っていただきたい。

(2022年3月2日 受理)